

『ふおん・しいほるとの娘』

吉村昭著／新潮社

私と年代の近い方だと、30年以上前に、テレビの朝ドラマ（TBS系1970年）で「オランダおいね」という番組があったのを覚えているのではないのでしょうか。私自身、ドラマのストーリーは全く覚えていないのですが、主演女優は、美貌の女優丘みつ子でした。吉村昭氏の『長英逃亡』の後に、1800年代の日本の状況についてももっと知りたいと思い、手にしたのがこの本で、そして思い出したのが先の朝ドラの題名でした。

吉村氏は、主に歴史小説を多く執筆していますが、当然とは言え、事実を丹念に集め、当時の世相を鋭く描く作家として知られています。私も、若い頃は司馬遼太郎の明るい世界に強く影響を受けましたが、ある年代を過ぎたころからは、同じ題材を扱っていても、司馬遼太郎の『坂の上の雲』における日本海海戦よりは、吉村昭の『海の史劇』に戦いの虚しさを感じ、『ポーツマスの旗』の外交官の必死の努力と報われぬ悲哀に想いを共有できるようになりました。

前置きが長くなりましたが、1823年にオランダから日本にやってきた医師シーボルト（正式名はフィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルトで、ドイツ人）の娘として1827年に生まれたのが主人公のイネ（楠本イネ）です。数奇な出自のため、幾多の苦労を背負いながら、日本人として初の女医となり、宮内庁御用掛にも任命された後、1903年、享年76歳で天命を全うするまでの人生を描いたものです。

時は、江戸幕府も最後の下り坂を転げ落ちる直前で、1829年シーボルト事件（シーボルトが日本の地図を国外に持ち出そうとした事件）、1837年大塩平八郎の乱、1839年蕃社の獄（渡辺崋山、高野長英）、アヘン戦争（1840～2年）、1841年天保の改革、1853年ペリー来航、1858年安政の大獄、1860年桜田門外の変、1867年大政奉還、1868年明治維新、と世は将に激動の時代でした。

シーボルトはオランダ国からいろいろな使命を背負わされて長崎の出島に来ます。欧州の優れた医術を身につけていたことは、当時の日本にとって非常に有益で、鳴滝に塾を作り、多くの弟子を育てたことはあまりに有名です。しかし、日本国の詳細な地図を持ち出そうとしたことで、国外追放になりました。イネが2歳のときです。イネの母は芸妓でしたが、当時の長崎は日本で唯一国外に開かれた場

---

所でもあって、比較的自由の雰囲気があったようです。とは言っても、見るからに日本人とは違った容貌で目立っていて、幼い頃から、自分は一人で生きていかなければならないという意識が強かったようです。

13歳の時に、自立のため、長崎から伊予宇和島の二宮敬作というシーボルトの弟子だった医師の下に旅立ちます。船と徒歩しか手段のない時代の一人旅に、単に“健気”という以上に、自分の置かれている厳しい境遇を受け止め、生き抜くという意志の強さに感動させられました。そこで5年を過ごした後、産科の専門を極めるため、岡山の石井宗謙の下に行きます。彼もシーボルトの弟子で、イネの指導をよくしたのですが、齢とともに際立つ容姿を備えたイネに、師としての理性を失い、過ちを犯します。25歳になっていたイネですが、人間に絶望し、生きることにも絶望し、うつろなまま母のいる長崎に戻ります。しかし、子のために生きることを決意し、また、産科の技術が世間から求められたことも幸いして、再び医学の道に挑戦します。村田蔵六（後の大村益次郎）にオランダ語を教わったりもしています。

ペリーの来航以来、欧米各国から日本に開国の圧力がかかる中で、イネが32歳の時に、父のシーボルトが再びオランダの特使として30年振りに来日します。昔の弟子が鳴滝塾に集まりますが、30年間欧州で政治の世界で生きてきたシーボルトには、新たな医学の知識はなく、弟子はおろか、娘のイネにまで愛想を尽かされる結果となり、1年半で帰って行くこととなりました。

幕末から明治の動乱期にも、産科の技術で伊予の伊達藩主（宗城）や福沢諭吉とも知り合い、46歳の折には宮内庁御用掛にまで採用されるのですが、開国した明治初期の学術、技術の進歩は著しく、産院を開業しているだけのイネには、それらの流れに付いて行くことはできず、50歳の折に、再び故郷の長崎に戻ります。

望んでできた子ではなかったとは言え、その子が支えとなり、さらに3人の孫にも恵まれ、日本で最初の女医という称号を残して76年の人生を終えました。

私の筆力では吉村昭氏の名を汚すことを恐れます。是非、皆さんの目で読み、心で感じてもらえればと思います。

---

## 執筆者紹介

丸山 久一

環境・建設系教授、専門領域はコンクリート工学、耐震工学。

---

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『ふおん・しいほとどの娘 上・下巻』吉村昭著 新潮社（新潮文庫） 2009年  
935, 987円

[ブックガイド目次へ](#)